



# アヲ丹海

6つの中・短篇小説

文藝春秋版

アラフラ海

一九七九年九月十日 第一刷

一九七九年十一月十五日 第二刷

著者 丸山健二まるやま けんじ

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三  
電話(〇三)二六五一一二一一

定価 九二〇円

印刷所 凸版印刷

製本所 和田製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

アラフラ海・目次



レッド・サンド・モーター 5

オパール 33

アラフラ海 59

死者 87

吊り橋を渡る 103

祭り 131



レ  
ッ  
ド  
・  
サ  
ン  
ド  
・  
モ  
ー  
テ  
ル





## ☆

私はレッド・サンド・モーターの前庭でビールをちびちび呑みながら、もう長いこと寝そべっている。三つ並べた椅子の上に横たわって、じっとしている。そこには怠惰な時間と間延びした空間とあり余るほどの陽光が満ちあふれているばかりで、ほかには何も無い。見るべき価値がありそうな物はほとんどない。周囲にはゆるく湾曲した一本の線、高温のために絶えず揺れている地平線があり、その内側には赤い砂と野火が黒焦げにしたブッシュが拡がり、そしていたるところにまともに眼を開けていられないほど眩い大気の流れがある。退屈きわまりない、まだるこしい眺めだ。

それでもときどきなら視線をとめておける物がひとつある。かつて音もなく地表を突き破って盛りあがったという巨大な岩のかたまりが、私の真正面に仰々しい姿をさらけ出している。形はバフンウニに似ており、色はこの砂とまったく同じだ。ひとかたまりの岩としては世界一の大きさだそうだが、こうなると山と呼んでも決しておかしくはない。だが、ただそれだけのことだ。

そこにあるすべてを私はどうしても好きになれない。いや、信じていないのだ。映画のセツトの中にあるような気分ではない。従って感動もない。追い払っても追い払っても群がってくる小さなハエ、大地を一面に覆っているレンガ色の砂、吹いてくれないほうがまだましな生ぬるい風、野性犬ディングゴの卑屈な遠吠え、それら全部を私は受け入れたくないのだ。しかしこの仕事を私に与えた化粧品会社では、とても気に入っている。かれらは、旅行雑誌のグラビアでしか見たことがないこの風景を核にして好き勝手にイメージをふくらませ、数種類の絵コンテを作ってから、私にこう命じたのだ。どこまでも野性的で、且つ男性的な写真を撮ってこい、と。主題は灼熱の太陽と砂漠、それにエアーズ・ロックだ、と言った。

ところが、ここへ私たちが到着した日に雨が降った。二日前のことだ。飛行機の車輪が地面をこすった途端に地平線に沿って太い稲妻が何本も走り、分厚い雲が信じられないほどの速さで空を埋め尽し、目まぐるしく方向を変える突風が吹いてきたかと思うと、私たち三人はぬかるみの中にずぶ濡れになって立っていた。貧弱な飛行場からレッド・サンド・モータールまでのわずか数百メートル足らずのあいだに送迎用の乗用車が三度も泥にはまりこみ、結局応援に駆けつけた四輪駆動車に乗り替えなければならなかったのだ。

こんなところまできて苛立っているのは、おそらく私ひとりだろう。今度の仕事で私が雇

った男性モデルとカメラマン、それに大型バスで地平線の彼方からやってきた年寄りばかりの観光客、かれらは皆雨のために旅の日程が延長されたことを喜んでいる。観光客の誰もがよぼよぼしているくせに、かれらはタイヤのように硬い肉をたっぷりと胃袋へ送りこみ、ビールをたくさん呑んで、朝から晩まで談笑と小銭を賭けたビリヤードに興じている。

しかし私はかれらの流儀にならつくつろぐわけにはゆかないのだ。一日も早くこの仕事をすませてさっさと帰国し、次の仕事をもらうためにスポンサーをつかまえなければならぬ。私を相手にしてくれる会社はどうせ二流か三流だが。そんなことは大した問題ではない。今こうしているあいだにも、あの女の気持ちが変わっているかもしれないのだ。私の最大の望みは彼女をおいてない。彼女と結婚することしかない。私は本気だ。彼女をほかの男に渡したくない。

そうするにはとりあえず金が必要だ。彼女は私にこう言った。安売りをしたくないのよ、と。また、こうも言った。どうせするならみじめたらしい出発はしたくないでしょ、と。その言葉は正しくないかもしれないが、間違いいではない。すでに三十年生きてきたのだから、それくらいのことには私にもわかる。

今、ユーカーリの樹の下では、私の連れてきた男のモデルがモーターの女の従業員をからか

っている。ここへきてからというもの、彼はずっとそうやって時間を潰している。朝食のとき、彼は言った。夕方までには新しい女を口説き落して、夜には自分の部屋へ引っ張りこむつもりだ、と自信たっぷりに言っただけだ。きのうの晩もその前の晩も彼はそれに成功していた。

モデルとしての彼は決して一流ではないが、それでも年収は私の三倍もある。女の従業員の大半は、そんなことを知らなくても、彼に好意的だ。どしゃ降りの雨をくぐり抜けてレッド・サンド・モーターの扉を押し開けた瞬間から、どの女も彼に特別の態度を示したのだ。彼が現われたというだけで、彼女たちは一斉に瞳を輝かせた。

私はそのモデルをばかにしている。女の話しかできないことでばかにしている。しかし、彼のほうでも私を軽く見ているようだ。この業界ではまだ大した力を持っていないことで、私をしばしば無視する。出発前に彼はこう言った。これはちょっととした小遣い稼ぎだね、と。そうかもしれない。私は彼に十分なギャラを支払えない。私が頭を下げたのであって、彼ではない。

私が彼をどんなに低く見たところで、彼は平気だろう。彼は大勢の女の視線の中でのべつ充実していられるのだから。通りすがりの女を振り返らせ、見ず知らずの女に見つめられる

ことで、彼の人生は確かに輝いている。彼にとって少しぐらいの頭のわるさなどどうでもいいことなのだ。しかし、彼の充実が果していつまでつづくだろうか。おそらくあと十年とは持つまい。引退までにスナックの一軒でも開いていたら上出来だろう。

だが私はといえば、彼の半分も満足に生きていない。しょっちゅうスポンサーに頭を下げ、のべつあたふたしているばかりだ。どうしてもあの女が必要だ、と私は強く思う。彼女と結婚することによって、次々に黄金色に輝く階段をのぼって行けるのではないかと思う。

一頭のディングゴが枯れた草を顔で押しつけながら、雨の匂いが残っているぬかった道の方へ、のろくさと歩いて行く。それは小型のトカゲ同様いたるところで見られるために、またありふれた犬にそっくりなために、野性の感動を与えない。夜になってディングゴの眼がそこかしこで青々と光るとき、私はあの女を突然思い出す。思い出して、いもしない相手を抱き寄せようとする。彼女はつつましく、いや、よそよそしく私の求めに応じた。だが、それきりだった。その仕事が終わると同時に彼女は私から離れた。だから私はもう一度彼女といっしょに仕事をするために奔走してみたが、だめだった。どうせなら若いモデルを安いギャラで使え、とスポンサーは言った。彼女は電話には出てくれても、私に会おうとはしなかった。忙しいの一点張りだった。友人が忠告した。モデルにはよくあるタイプではないか、と。そ

れくらいわかっていると、思っていたのに、と。ついで彼はそっぽを向いたまま言った。あの手の女は仕事がらみだとどんな男とでも寝る、と。彼を殴っておくべきだった。

飛行場まで見送りにきてくれるはずだったが、しかし彼女は遂に姿を見せなかった。急ぎの仕事があったに違いない。どうしてもと事務所に泣きつかれたのだろう。私は二日前から何回となく考えている。彼女が所属している事務所に電話をかけてみようか、と。だがモーターの支配人の説明では、無線電話だから外国へうまく通じるかどうかからないという。それに第一、今度の予算はぎりぎりなのだ。雨で日程が延びたから、高い電話代を支払う余裕はない。みやげ物を買ってやるだけでたくさんだ。彼女は言った。コアラの縫いぐるみとオパールの指輪が欲しい、と。

彼女がほかの女と大いに異なっているのは疑いの余地がない。誰が何と言おうと、私にとっては特別な存在だ。あっさりとうっちゃらかしてしまえる女ではない。これまでに付き合った女など彼女に比べれば……比較にもならない。口のきき方といい、声の良さといい、身のよじり方といい、すべてが申し分ない。この先彼女を上回る女に出会えるかどうかは疑問だ。ふんぞり返って忠告の言葉を荒々しく投げつけてくる友人に対して、私は応戦を試みた。だが、しまいには怒鳴るしかなかった。彼女を知らないくせに余計なお世話だ、と。

本当は私も承知しているのだ。彼女のことですっかり頭に血がのぼってしまっているくらいわかつている。だが、それが一体どうしたというのだ。

生ぬるくなった残りのビールを、私は一気に呑みほす。それから、腕にとまって汗を舐めていたしつこいハエの上に掌を勢いよくかぶせて、いっぺんに四匹の命を奪う。ついで、空になったビール壺を椅子の下へころがしてやる。

まだ十一時にもなっていない。けれども気温は四十度近くあり、赤砂の表面から蒸発する多量の水分が私の体にまつわって汗の玉をふくらませ、背中や脇の下は乾くことがない。彼女も汗かきだ。私たちは汗にまみれて夜が明けけるまで抱き合ったものだ。その間彼女はジュースを半ダースも飲んだ。

やはり電話をかけるべきだろうか。驚いて喜ぶ彼女の声を聞けば、少しは落ち着いた気分になれるだろうか。だが、たとえうまく電話が通じても、この時間に彼女が事務所にいるとは限らない。アパートにもいないかもしれない。いたとしても、傍に寝そべって横眼で見ている男の手前、まともな受け答えができないかもしれない。汗に覆われた彼女の体に舌を押しつけて、一向に衰えない欲望にさいなまれている男はどこの誰だろうか。私と比較できるほどの男だろうか。あるいは、ありとあらゆる点で私を凌駕しているまぶしいほどの男だろうか。



か。

友人の忠告が一から十までの中していたとしても、私は断じて諦めない。彼女が本当はどんな女であろうと知ったことではない。彼女はまだ私を一度も失望させていない。あれは特別の女だ。彼女にとってもこの私は特別の男であるはずだ。いつの日か彼女は、私が本気だということを知ってわかってくれるだろう。わかってくれなくても、私は彼女と結婚する。彼女といっしょになりさえすれば、私はこの先ずっと輝くことができる。彼女が傍にいてくれたら、ぬかるみに囲まれたレッド・サンド・モーターに永遠に閉じこめられても平気だ。

赤砂のぬかるみも、黒焦げのブッシュも、バフンウニを連想させる巨大な岩も、野良犬と少しも変らないディンゴも、彼女が傍にいれば、感動の光を放つだろう。そしてやがて私は人通りの多い一等地に間口の広い事務所を構えることができ、数人の遣り手を雇えるような身分になれるだろう。だから彼女は後悔しなくてすむ。

ユーカリの樹の下にいるモデルは、相変らずだ。通りかかる女の従業員をつかまえては、きわどい言葉を浴びせかけている。彼に声をかけられるだけで、どの女も有頂天になる。目くるめく高空から降り注ぐ陽光のために、大気は絶えず揺らいでいて、時間はひどく怠惰なものとなり、その中であって彼はせせせと今夜の相手を物色している。彼はそうやってす